

特集 大阪のサシバは生き残れるか? サシバの生息環境とその現状

大阪府のサシバの現状：近年の生息状況と生息に影響を与える要因

サシバプロジェクト in 大阪 大 西 敏 一

Recent status of the Grey-faced Buzzard in Osaka, and possible factors affecting its distribution. Toshikazu Onishi (*Grey-faced Buzzard Project in Osaka*)

はじめに

中型猛禽類のタカであるサシバは、近年、日本各地で減少が指摘されている（東，2016；野中ほか，2012）。大阪府では、サシバはかつてトビに次いで多いタカであったが、近年減少していると思われ、絶滅の心配をする声もあがっている。しかし、その現状は必ずしも明らかではない。

大阪府におけるサシバの調査・研究は、1977年～1980年に河内長野市近郊で小島幸彦氏により行われたもの以外に（小島，2016）、府下全体での分布調査が実施されたこともない。大阪市立自然史博物館ウェブサイト内の「和田の鳥小屋」（<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/Breed/Butastur.html> 2016.10参照）には、1990年～1999年までの繁殖期（5～7月）における府下の確認情報が公開されているが、2000年以降の情報は蓄積されていない。

大阪府のサシバの保全を考えるには、まず本種の現状を把握する必要がある。そのような問題意識のもと、2014年、（公社）大阪自然環境保全協会が中心となって、日本野鳥の会大阪支部などに声をかけ、有志によって「サシバプロジェクト in 大阪」が活動を始めた。

本稿では、「サシバプロジェクト in 大阪」の活動の一環として、2015年に著者が中心となって

集めた近年の大阪府でのサシバの生息情報をまとめる。同時に、大阪府でのサシバの生息状況について、著者の私見をまじえて述べる。

今回の情報収集にあたり、大阪府南河内農と緑の総合事務所とNEXCO西日本にはアセスメント調査での貴重なデータを提供していただいた。また、株式会社建設環境研究所、株式会社西日本技術コンサルタント、南大阪野鳥研究会および熊代直生氏、小海途銀次郎氏、小室巧氏、阪上和男氏、高田みちよ氏、谷川智一氏、納家仁氏、廣田博厚氏、守屋年史氏、山田浩司氏、与名正三氏、和田岳氏、和田信雄氏の皆さまには生息情報や写真の提供をしていただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。

調査方法

近年の大阪府のサシバの生息状況を把握するため、2000年から2015年において、①アセスメント関連の調査で得られた情報、②日本野鳥の会大阪支部や地域の野鳥の会ならびに各種団体・グループ（大阪鳥類研究グループなど）に寄せられた情報、③大阪府内で鳥を調査・観察している個人の情報を集めることにした。個人が持っている情報は、著者が中心となって個人的に聞き取りを行った。

結果をまとめる際には、渡来後にペア形成をし、繁殖の成否にかかわらず繁殖期を通じて生息が確認されたものを「ペアの生息」と定義し、市町村ごとにペアの生息数を評価した。複数年にまたがって、ペアの生息数を評価する際には、生息地を考慮して、同じなわばりに生息すると考えられるペアを同一ペアとして、いわばペアの生息地点数としてペア数を評価した。

結果と考察

調査の結果、2000年から2015年までの16年間に、大阪府全域で35ペアの生息が確認された（図1）。30数年前の調査（小島，2016）では、河内長野市を中心とする地域だけで、4年間に約30ペアが確認されていたことを考えると、ペアの生息数が著しく減少したことが分かる。

ペアの分布は、北摂山地を中心とする大阪府北部と、金剛山地から和泉山脈およびその周辺である大阪府南部に分かれていた（図1）。それぞれの地域のペアの生息数は、北部で19ペア、南部では16ペアであった（図1）。

表1には、大阪府北部と南部のペアの生息数を、年ごとにまとめた。2011年まで大阪府南部でペアの確認数が少ない原因としては、大阪府北部に比べてアセスメント関連の調査が少なかったことと、大阪府南部を継続的に観察している者がいなかったという観察頻度の低さの影響が考えられる。

表2には年ごとのペアの生息数を市町村別にまとめた。ペアの生息が確認されたのは9市3町。その内訳は、大阪府北部は、豊能郡能勢町、豊能郡豊能町、箕面市、茨木市、枚方市の5市町。大阪府南部では、堺市、和泉市、岸和田市、泉南市、富田林市、南河内郡河南町、河内長野市の7市町であった。茨木市のペアの生息数が群を抜いて多いのは、複数のアセスメント関連調査が継続的に

行われ、調査頻度が高かったことが考えられるが、同地域は里山的な本種の好適な生息環境が残っている地域でもある。

図1をみると、北は高槻市から南は柏原市までが、ペアの生息が確認されていない空白地域であり（枚方市は2000年にペアの生息あり）、現在、生駒山地は、大阪府側ではサシバが生息せず、奈良県側にのみ生息している状況にある。なお、空白地域で繁殖が確認されたのは、高槻市の1992年（又野ほか，2006）、枚方市の1999年（枚方いきもの調査会 野鳥部会・枚方野鳥の会，2007）が最後となっている。

表1と表2からは、途中でペア数の減少があったものの、2014年までは増加傾向がみとれる。

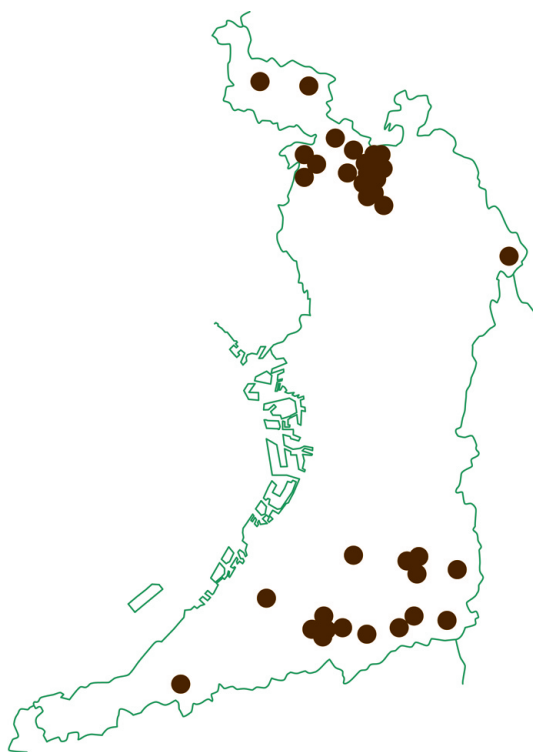


図1. 大阪府における2000年から2015年のサシバの繁殖分布。●はペアの生息情報があった大まかな地点を示す。

しかし、すべての地域が同じ頻度で調査されているわけではなく、調査頻度の影響が含まれている可能性がある。そこで2000年以降、比較的安定して調査頻度が高かった茨木市だけを抜き出して、生息地点ごとのペアの生息状況と繁殖結果を示したのが、表3である。茨木市では、この間、毎年少なくとも1ペアの生息が確認され、多い年には

5ペアが確認された。しかし、2014年まで継続的に生息していたのは1ヶ所のみで、他は単年の生息であったり、数年間生息が確認された後、確認されなくなっている。

サシバの生息ペア減少の理由

高頻度で調査された茨木市において、単年や数

表1. 大阪府のサシバのペア生息数. ペアの生息情報があった地点数なので、これ以外にも生息していた可能性はある.

年 地域	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	ペア数*
大阪府北部	6	7	6	3	4	6	6	5	4	4	4	4	7	7	7	1	19
大阪府南部	1	3	0	0	2	0	3	1	2	0	0	0	2	2	3	3	16
合計ペア数	7	10	6	3	6	6	9	6	6	4	4	4	9	9	10	4	35

*ペアの生息数の合計ではなく、ペアの生息地を考慮しての生息地点数.

表2. 市町村ごと的大阪府内のサシバのペアの生息数.

年	大阪府北部					大阪府南部							合計 ペア数
	能勢町	豊能町	箕面市	茨木市	枚方市	堺市	和泉市	岸和田市	泉南市	富田林市	河南町	河内 長野市	
2000	1	2		2	1	1							7
2001	1	1		5		1	2						10
2002	1	1		4									6
2003	1	1		1									3
2004	1	1		2					1	1			6
2005	1	1		4									6
2006	2	1		3			2					1	9
2007	1	1		3								1	6
2008	1	1		2								2	6
2009	2	1		1									4
2010	1	2		1									4
2011	1	2		1									4
2012	1	1	2	3				1				1	9
2013	1	1	2	3							1	1	9
2014	1	1	2	3						3			10
2015			1				1			1		1	4
ペア数*	2	2	2	12	1	1	5	1	1	3	1	4	35

*ペアの生息数の合計ではなく、ペアの生息地を考慮しての生息地点数.

表 3. 茨木市の生息地点ごとのペアの生息状況。○：繁殖成功，△：繁殖失敗，×：ペアの生息なし，－：情報なし。

年	ペア												合計 ペア数
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	
2000	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	○	2
2001	-	-	○	○	○	-	-	-	-	-	○	○	5
2002	○	-	-	-	×	△	-	-	-	-	○	○	4
2003	-	-	-	×	×	×	-	-	-	-	○	×	1
2004	-	○	-	×	×	×	-	-	-	-	○	×	2
2005	○	○	-	×	×	×	△	-	-	-	○	×	4
2006	○	○	-	×	×	×	×	-	-	-	○	×	3
2007	○	○	-	×	×	×	×	△	-	-	○	×	3
2008	×	○	-	×	×	×	×	×	-	-	○	×	2
2009	×	△	-	×	×	×	×	×	-	-	○	×	1
2010	×	△	-	×	×	×	×	×	-	-	○	×	1
2011	×	×	-	×	×	×	×	×	-	-	○	×	1
2012	×	×	○	×	×	×	×	×	△	-	○	×	3
2013	×	×	○	×	×	×	×	×	△	-	○	×	3
2014	×	×	○	×	×	×	×	×	×	△	○	×	3
2015	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0

年でサシバのペアが飛来しなくなった要因としては、①開発による環境の改変，②里山環境の衰退，③農業の変化，④オオタカやノスリの進出，⑤人為的圧力などが考えられる。それぞれの具体的な影響としては、

- ①道路整備や宅地開発などで、営巣地や採食地など生息環境全体または一部が消失・変化する。
- ②人のライフスタイルの変化から里山に人の手が入らなくなり（薪炭林がなくなるなど）、採食地が消失するなど生息環境に変化が生じる。
- ③圃場整備により、カエルや昆虫など食物となる動物の生息や発生が大きな影響を受け、食物が減少する。農薬の使用で食物となる動物が死滅する。耕作放棄により植物の遷移が進み、採食地として適さない環境になる。水田が畑地に転作されることで食物となる動物が減少する。
- ④オオタカやノスリがサシバの生息環境に進出することで、営巣地の乗っ取りや、オオタカによりサシバが捕食される。大阪府では2000年頃か

らオオタカの低地への進出が目につき始め、現在ではサシバの生息地に入り込んだペアも確認されている。

- ⑤カメラマンやバードウォッチャー、各種調査員などが、必要以上に生息地に立ち入ることで生息に影響が出る。

などが考えられる。こうした要因が複合的に絡み合い、サシバの減少につながったと推測されるが、もう一つ注目すべき事柄として、「電気柵・シカ柵の設置」をあげておく。

電気柵・シカ柵が与える影響

電気柵・シカ柵は、多くの場合、水田を取り囲むように畦に設置される（図2）。サシバが水田で採食する際は、水田脇の林縁部（時には電柱などの人工構造物）にとまり、目視により畦にいるカエルやトカゲ、昆虫類を見つけ、そこへ降りて捕食する。水田にいるカエルを捕食する際にも直接水田に飛び込むことはほとんどせず、まず畦に

降りてから次の捕食行動を取る。そのため、畦に柵のような構造物があると降りる際の障害となる。さらに、電気柵の細い支柱や緑のない金網柵にはとまりにくく、採餌行動を阻害してしまう結果となる。また、電気柵に直接触れることにより感電するケースも考えられる。以前、電気柵のある畦に降りた個体が、突然慌てて飛去した場面を観察したことがあるが、その電気柵は常時に通電していたことから、体の一部が柵に触れて感電した可能性があると考えている。その個体は近くで営巣していたペアの雄であったが、それ以降その場所から忽然といなくなった。その後、ペアの雌も



図2. シカ柵のある水田。大阪府豊能郡能勢町。



図3. 大阪府茨木市のサシバのペア生息地。2007年10月撮影。

確認されなくなり、最終的に生息ペアは消失してしまった。

前述した茨木市は、2005年前後からニホンジカの侵入が顕著になった地域で、それに合わせるように柵の設置が始まった。著者が継続的に観察していたAペアとBペアは、里山的な環境に生息し(図3)、水田を採食地として利用した。しかし、柵の設置と同時に水田には来なくなり、採食地を伐開地や林地に変えてしまった。その後、Aペアは2008年に飛来しなくなり、Bペアでは繁殖の失敗が続いたのち、2011年から確認されなくなった。

このように電気柵・シカ柵によるサシバが受ける影響としては、採食行動の阻害と、直接接触による感電が考えられ、その結果、採食場所が変わるなど生活様式に変化が生じ、場合によっては、そこに生息している個体・ペアがいなくなる可能性がある。近年、西日本ではシカやイノシシによる農業被害が多く、電気柵やシカ柵があちこちに設置され、サシバに与える影響は大きいのではないかと推測している。

乾性環境を利用する大阪のサシバ

一般的にサシバは、低地から丘陵の森林に生息し、谷底が水田になっていて周囲を丘陵林が囲んでいる谷津田や谷戸と呼ばれる里山環境が生息場所とされている(野中ほか, 2012)(図4)。しかし、これは主に東日本における生息環境であり、大阪府をはじめとする西日本では少し様相が異なっている(東, 2013)。

大阪府北部では、サシバは里山的な環境から山地帯に生息している(図5)。興味深いことに、水田がある場所に生息する個体でも水田では採食せず、伐開地や林地、果樹園、草地、荒地などを採食地にしている。能勢町に詳しい方によると、10年以上も前から水田には採食に来ないという(阪上氏私信)。大阪府北部の水田の多くには、電



図 4. 一般的なサシバの生息環境である里山。滋賀県大津市。



図 5. 大阪府北部のサシバの生息環境の一例。大阪府豊能郡能勢町。



図 6. 大阪府南部のサシバの生息環境の一例。大阪府和泉市。

気柵やシカ柵が張り巡らされていることからすると、柵の影響を受けている可能性が考えられる。

一方、大阪府南部では、急峻な山間部でクマタカと同所的に生息するペアが存在する（図 6）。北陸地方や西日本では、山地帯に生息するケースは普通であり、水田がほとんどない山間部にサシバが生息することは珍しくない。

なぜ山地帯に生息し、水田があるにも関わらず、乾性環境に依存して生活するサシバがいるのか。その理由として、

- ①里山環境が消失したために、山地環境へと移動した。
- ②水田に食物となる動物がいらない、または捕れなくなったために、採食地を乾性環境へと変えた。
- ③低地へのオオタカの進出により、生息場所を山地寄りに移動させた。
- ④元々山地にも生息しており、乾性環境を利用していた。

などがあげられ、このいずれもが関係あるのではないかと考えている。

今回の調査の結果、大阪府のサシバは、山地帯にも生息し、水田のような湿性環境よりも伐開地などの乾性環境を利用しているものが多いことが明らかになってきた。これまで著者が西日本各地でサシバを観察した経験からすると、この傾向は大阪府だけでなく西日本に広く当てはまると考えられる。

おわりに

今回の調査の結果、大阪府における近年のサシバの生息状況がある程度明らかになった。しかし、まだまだ情報は不足しており、大阪府での生息状況の全容を把握するには至っていない。大阪府北部は比較的良好に調べられているのに対して、大阪府南部にはまだまだ調査の余地が残っている。

今後、「サシバプロジェクト in 大阪」としては、既存の情報収集に加えて、現地調査を積極的に行い、大阪府のサシバの生息状況をより明らかにし、その上で大阪府でのサシバの保全を考えていきたいと考えている。当プロジェクトへの情報提供と合わせ、広く活動への協力をお願いする。

引用文献

- 東 淳樹. 2013. 里山環境におけるサシバの生息地管理. 「日本のタカ学—生態と保全」(樋口広芳編), pp. 237–256. 東京大学出版会, 東京.
- . 2016. 日本のサシバの生息状況と生息地の環境条件. 地域自然史と保全, 38(2): 83–88.
- 枚方いきもの調査会 野鳥部会・枚方野鳥の会 (編). 2007. 枚方の野鳥1981–2006. 8pp. 枚方いきもの調査会 野鳥部会・枚方野鳥の会, 枚方.
- 小島幸彦. 2016. かつての南大阪のサシバの生息状況と繁殖生態. 地域自然史と保全, 38(2): 89–93.
- 又野淳子・又野芳徳・高田みちよ. 2006. 大阪府高槻市におけるサシバの繁殖記録. Strix, 24: 161–166.
- 野中 純・植田睦之・東 淳樹・大畑孝二. 2012. アンケート調査によるサシバの生息状況(2005–2007). Strix, 28: 25–36.